vinetur

10月のシャンパーニュ出荷量は3.4%減、市場回復の持続性に疑問

フランス国内の出荷が7.3%減となり、輸出の底堅さを打ち消した。年末商戦を前に、年初来の伸びは2%に縮小。

2026年11月17日（火）



シャンパーニュの出荷は、2カ月続いた好調の後、10月に勢いを失った。年末商戦を控え、市場回復がどこまで続くのか、新たな疑問が浮上している。

WineCoutureが引用したComité　Champagneの統計によると、2026年10月の出荷量は2,960万本で、2025年10月から3.4%減少した。この落ち込みにより、年初から10月までの累計成長率は、9月末時点の3.2%から2%に縮小した。2026年1～10月の出荷総量は2億360万本に達した。

今回の減少は、夏の終わりに見られた急回復の後に起きた。8月の出荷量は24.8%増加し、続く9月も7.8%増となったが、10月にこの流れが途切れた。時期が重要なのは、シャンパーニュの出荷に

おいて10月が小さな月ではないためだ。年間出荷量の約11.8％を占めるのが通例で、メーカーや流通業者が年末商戦に向けて在庫を確保するうえで重要な時期となる。

10月の落ち込みが最も大きかったのはフランス国内だった。国内出荷は前年同月比7.3％減の1,110万本となった。輸出は比較的底堅かったものの、こちらも1％減の1,860万本にとどまった。輸出市場のうち、欧州連合（EU）向けは1.2％増の690万本だった一方、EU域外向けは2.2％減の1,170万本だった。

10月に減速したとはいえ、今年のシャンパーニュを支える主な柱は引き続き海外市場だった。1～10月の輸出は5.6％増の1億2,840万本となった一方、フランス市場は3.5％減の7,530万本だった。この期間、輸出市場は出荷総量の63％強を占めており、同カテゴリーがフランス国外の需要に大きく依存するようになったことがうかがえる。

主要な輸出先であるEUとEU域外は、ともに1～10月の累計でプラスを維持したものの、伸びは9月時点から鈍化した。EU向けは6.7％増の3,900万本、EU域外向けは5.1％増の8,940万本だった。9月末時点では、EUが8％増、域外市場が6.3％増と、伸びはいずれもより大きかった。フランス市場も悪化し、9月末時点の2.5％減から、10月を経て3.5％減となった。

統計からは、業界の大手と小規模事業者の明確な差も浮かび上がった。成長を主にけん引したのはシャンパーニュ・メゾンだった。2026年1～10月の出荷量は4.1％増の1億5,540万本となった。輸出が6.8％増と伸びた一方、フランス国内向けの出荷は2.2％減だった。シャンパーニュ・メゾンは出荷総量の4分の3超を占めており、その動向は市場全体を引き続き左右している。

対照的に、独立系の栽培農家は厳しい状況が続いた。1～10月の出荷量は4.4％減の3,210万本となった。フランス国内向けは7.7％減と、カテゴリー全体を大きく上回る落ち込みだった。輸出は6.2％増えたものの、国内の不振を補うには至らなかった。1～10月の成長率には大手メゾンと独立系栽培農家の間で8.5ポイントの差があり、格差は依然として大きい。

協同組合もマイナス圏にとどまった。1～10月の出荷量は3.3％減の1,620万本だった。なかでも10月は厳しく、月間出荷量は前年同月比17.5％減となった。メゾンや栽培農家とは異なり、協同組合はフランス国内で比較的底堅く、出荷量は2.8％増えたが、8.7％減となった輸出の不振に見舞われた。

直近12カ月の累計でも、回復がなお不安定であることが示された。2025年11月から2026年10月までの出荷量は2億7,020万本で、直前の12カ月間から0.4％増加した。プラスではあるものの、9月末時点の数値を下回った。9月末時点では直近12カ月の出荷量が2億7,140万本、伸び率が0.8％だった。わずか1カ月で累計出荷量は約120万本減少した。

この広い期間で見ても、年初来の数値と同じ傾向が確認できる。12カ月間で輸出は3.8％増えた一方、フランス市場は4.1％減だった。シャンパーニュ・メゾンの出荷は2.1％増加したが、独立系栽培農家は4.7％減、協同組合は2.1％減となった。

統計は、シャンパーニュ市場が2026年も回復基調にある一方、その回復は一様ではなく、8月と9月の好調な結果が示唆したほど確かなものではないことを示している。夏場の増加分は維持されているものの、伸びのペースは明らかに鈍化した。年末の出荷動向は、年間で最も重要な販売期におけるスパークリングワイン流通全体の販売見通し、在庫管理、価格決定にも影響しうるため、飲料業

界全体にとっても重要だ。

輸出市場とフランス国内、そして大手メゾンと小規模事業者の間に広がる差は、小売業者、輸入業者、生産者が年末までの数週間にどう対応するかにも影響する可能性がある。海外需要の底堅さが出荷総量を2025年の水準以上に保っているものの、その恩恵は幅広い販売網を持つ企業に集中している。独立系生産者にとっては、海外市場が改善しているなかでも、国内市場の低迷が引き続き大きな課題となっている。

シャンパーニュの2025年通年の出荷量は2億6,600万本だった。産地にとって例年、11月と12月は決定的な月となるため、2026年の最終実績は、フランス国内の不振と10月の減速が続くなか、輸出需要がそれを補えるほどの強さを保てるかに大きく左右される。